

じょい joy

- 特集…… P2-3
- ふくし掲示板…… P2-3
- わが町のふくし人…… P3
- 矢巾町サロン情報…… P4

じょい joy マスコット犬
じょいワン・パールちゃん

福祉目線
のタウン情報通信

13
2025.12.22



特集

生活支援コーディネーターがお届けする
高齢者にやさしいお店
「もの忘れ、年のせい？」
MCI（軽度認知障害）について



前回までの
じょい joy は
こちらから



「高齢者にやさしいお店」とは、「認知症サポーター養成講座」を受講して認知症を正しく理解し、地域の高齢者に「やさしく」「利用しやすい」工夫やサービス提供をしている店舗・事業所のことです。じょい joy は、登録店の情報の掲載を通じて町中に「やさしいお店」が広がっていくことを期待しています！



じょい joy マスコット犬
じょいワン・モコちゃん

セブン-イレブン岩手医科大学西店 [せぶんいれぶんいわていかだいがくにしてん]

医大近くにあるセブン-イレブン岩手医科大学西店は、広々とした駐車場と豊富な品揃えで、学生から高齢の方まで多くの人が訪れる人気のお店です。店内はバリアフリーで、どなたでも安心して利用できます。接客も丁寧で温かく、スタッフは皆、来店者一人ひとりに親身に声をかけます。お釣りや忘れ物にもすぐに気づいて対応するほか、重い荷物を持っている方のかごをレジまで運んだり、タクシーを呼んであげて待つ間にはイスを出したりと、細やかな心配りが行き届いています。

「お客様の『ありがとう』」が嬉しい瞬間です」とスタッフ全員が笑顔で語る、まさに「地域に寄り添うコンビニ」です。



スタッフの皆さん
からのひとこと

土谷さん (写真右)

「[ない]」で終わらず、できるだけお客様の要望に応えたいと思っています。オーナーに相談して取り寄せるなどの工夫をしています」

福土さん (写真左)

「高齢者の方々に[申し訳ない]と気をつかわせない接客を心がけています」

千葉さん (マネージャー) 写真なし

「地域に根ざした接客を大切にしています。利用して良かったと思ってもらえるよう、笑顔で親しみやすいお店を目指しています！」

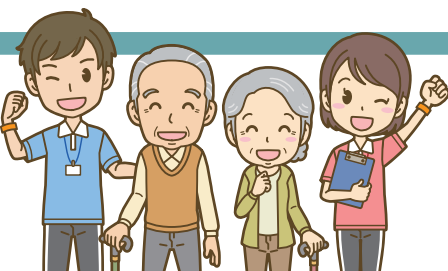
DATA

住所▶矢巾町又兵衛新田8-170
Tel▶019-611-1699
営業時間▶24時間営業 (年中無休)
駐車場あり

3. くし 掲示板

矢巾町キャラバン・メイト連絡会

～認知症になっても安心して暮らせるまちを目指して～



主な活動内容

- 町内での「認知症サポーター養成講座」の開催 (学校・事業所・地域団体など)
- 認知症カフェや地域イベントでの参加・協力
- 認知症に関する相談や情報提供を通して住民支援



矢巾町キャラバン・メイト連絡会は、「認知症サポーター養成講座」の講師役を務めるキャラバン・メイトたちが集まり、平成 25 年に結成しました。

キャラバン・メイトとは、地域の中で認知症への理解を広め、困りごとを抱える方やそのご家族を支える「つなぎ役」のような存在です。

私たちは、町や地域包括支援センター、福祉関係機関などと協力しながら、認知症に関する正しい知識や、誰もが安心して暮らせる地域づくりの大切さを伝える活動を続けています。



つながりと学び

毎月 1 回、キャラバン・メイトが集まり、活動報告や意見交換を行っています。定例会では、講座の進め方や伝え方を共有したり、他のメイトの工夫を学んだり、互いに刺激を受けながらスキルアップしています。また、活動の中で感じたことや地域の課題を話し合うことで、一人ひとりが自信を持って講師として活動できるようになる場でもあります。「ここでの学びやつながりが、日々の仕事や地域活動にも生きている」と感じるメンバーも多く、活動そのものが人との絆を深める貴重な機会になっています。

「もの忘れ、年のせい？」 それ、MCI (軽度認知障害) かもしれません



年を重ねると誰でも少しずつ「もの忘れ」は増えます。でも、その中には認知症の前ぶれとなる段階＝ **MCI (軽度認知障害)** が隠れていることがあります。

MCI とは？

MCI (エムシーアイ) は、認知症の一手前の状態のことです。

日常生活はほとんど普通に送ることができますが、記憶力や判断力などに少しずつ衰えが見られます。放っておくと、認知症に進むことがあるといわれています。逆に、生活習慣を見直すことで元に戻る人もいます！

● 気になるときは早めに相談を

「ちょっと気になるけど、病院に行くほどでも……」そんなときは、まずかかりつけ医や地域包括支援センターにご相談ください。早めに気づくことで、進行を防ぐことができます。

● 予防のカギは「脳を守る生活習慣」

認知機能を保つためには、毎日の生活がとても大切です。



体を動かす

ウォーキング・体操・庭仕事などで血流アップ



頭を使う

料理・手作業・計算・読書などで脳を刺激



人とのつながり

おしゃべりや地域活動で気持ちも前向きに

小さな積み重ねが、将来の健康につながります。／

最近、こんなことはありませんか？

買い物に行ったのに、何をかうか思い出せない

約束をうっかり忘れてしまった

さっき聞いた話を思い出せない

何度も同じ話をするとと言われる

財布やカギなどの置き場所を忘れる

いくつか思いあたるときは相談してみてもいいかもしれません？



相談窓口

矢巾町地域包括支援センター

電話：019-697-5570 (えんじょいセンター)

019-611-2855 (ケアセンター南昌)

受付時間：平日 9:00 ～ 17:00

認知症サポーター養成講座を受けませんか？

～あなたの「理解とやさしさ」が、地域の力になります～



「認知症サポーター養成講座」は、認知症について正しく理解し、地域や職場、家庭の中で温かく支える「応援者＝認知症サポーター」を増やすための講座です。講座では、認知症の基礎知識や接し方、地域でできる支援の方法などを、キャラバン・メイト (講師) がわかりやすくお話しします。受講後は「オレンジリング (認知症サポーターの証)」が贈られます。

こんな方におすすめです

- ☒ 認知症について正しく知りたい方
- ☒ 家族や近所の方との関わりに活かしたい方
- ☒ 福祉・医療・介護の仕事に関心がある方
- ☒ 地域でボランティア活動をしている方

講座の概要

- 所要時間 おおよそ 60 ～ 90 分
- 費用 無料
- 対象 どなたでも参加できます (個人・団体・企業・学校など)
- 講師 矢巾町キャラバン・メイト
- ※出前講座 (出張開催) も可能です。町内のサークル・事業所・学校などへの出張もお気軽にご相談ください。

矢巾町地域包括支援センター

電話：019-697-5570 (えんじょいセンター)

019-611-2855 (ケアセンター南昌)

受付時間：平日 9:00 ～ 17:00

わが町の ぶく人



矢巾町キャラバン・メイト連絡会
会長
廣田 利津子 さん
合同会社かなめ
ケアプランセンターかなめ 管理者
主任ケアマネージャー
社会福祉士、介護福祉士

「地域の皆さんに認知症を正しく理解していただくことはとても大切です。私たちは、『困ったときに気軽に声をかけられる存在』を目指しています。これからも正しい情報を伝え、またさまざまな困りごとの相談にも寄り添いながら、『認知症になっても安心して暮らせる町』づくりのお手伝いをしていきたいです。」

次は藤根 千鶴さんへバトンタッチ！



～多世代交流を通して、地域共生社会に取り組む～

エン(縁)ジョイやはばネットワーク

えぞもりかい

「はつらつ狄森会(藤沢)」×「岩手県立盛岡となん支援学校」

● 地域共生社会とは？

人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会のことです。矢巾町でも、子ども、高齢者、障がい者などすべての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる地域共生社会の実現を目指しています。

● 多世代交流のきっかけは？

岩手県立盛岡となん支援学校では、令和4年から学校運営協議会を開催し、「盛岡となん支援学校の学習の充実のために！地域のために本校ができること」をテーマに熟議されています。学校運営協議会から、藤沢行政区民生児童委員でもある名取さんや、はつらつ狄森会の留場さんへとつながり、多世代交流が始まりました。



えぞもりかい

みやた

よしだ

とめばひろこ

はつらつ狄森会 (左から) 宮田サエさん、吉田フサ子さん、留場弘子さん



年に1度(11月頃)学校を訪問し、小学部のみなさんと昔あそびをしたり、名取さんの畑での収穫体験にも参加しています。子どもたちの笑顔を見るといとおしく感じます。交流は今年で5年目になりますが、顔を覚えてくれる子がいたり、1人で歩けるようになった子がいたり交流するたびに成長を感じます。



なとりやすひろ

藤沢行政区 民生児童委員 名取泰博さん



自宅の畑を交流場所として、年2回(6月・10月頃)小学部のみなさんと野菜の収穫体験をしています。野菜を作る張り合いにもなっており、子どもたちが喜んでくれることが一番嬉しいです。地域のつなぎ役として、岩手県立盛岡となん支援学校を矢巾町の住民に広く知ってもらいたいと思っています。



ふじむらとしこ

岩手県立盛岡となん支援学校 教務主任 藤村利子先生



はつらつ狄森会さんの、すべてを大らかに受け止め子どもたちと一緒に活動して下さることから生まれる交流会の雰囲気が、子どもたちの隠れていた主体性や感情豊かな表情を引き出しているように思います。収穫体験は、子どもたちが自然の温かさに触れる機会となり、「生きている」と実感できる活動になっています。これからも交流を通して、子どもたちが当たり前のように外へ飛び出していけるような社会を、地域の方々の力を借りながらつくっていきたいです。

